

三宅正浩著

『近世大名家の政治秩序』

木 土 博 成

本書は三宅正浩による初の論文集で、二〇〇八年に京都大学大学院文学研究科から学位を受けた博士論文に新稿を加え、再構成したものである。一読して、二五万石余を領した徳島藩蜂須賀家を主対象に据えながら、幕藩領主に共有された秩序を見通そうとした意欲作で、近年の日本近世史研究にあつて普遍性に拘った労作と見受けた。論証に関しては書状の発給年次の検討といった手続きを経るなど堅実で、政治を担う人々の意識をも射程にした骨太の政治史の成果と見た。

以下、まずは各章ごとに内容を確認して雑感を加え、ついで本書全体に関してその意義・疑問点を論じることにする。なお本書については三宅が引用する福田千鶴によるものをはじめ、複数の書評がすでに公にされている。あわせて参照されたい。

—

〈序章〉「近世大名家研究の課題と本書の構成」では、一九五〇年代以降の藩政（制）成立に関わる研究史に触れた上で、八〇年代以降に武家社会に注目した大名家研究が立ち現れ、二〇〇〇年代に入って「尾張藩社会」（岡山）藩世界」や高野信治「藩領

社会」などの統合化の動きが出てきたと整理する。それらを受け三宅は藩を語る上で前提として、中核にある大名家の成立を論じる必要性を提起し、本書が大名家研究であると宣言する。中でも近世大名家（幕藩領主）に通底する共通性を示したいとし、具体的には家老政治の分析を課題に挙げる。

〈第1章〉「近世蜂須賀家の「家中」形成と証人制—大名家における家老の位置」は、藩主を頂点に編成された家臣団に近世大名「家中」の形成過程を、將軍—大名—家老の三者関係の中で捉えたものである。ここでは、家老など大名家臣の子弟を質として江戸に送る証人制（寛文期まで存続）が、「家老」家格の形成を促した面が指摘される。そして家老が幕府公儀の世界の中に自らの位置を見出そうとした寛永段階と「家中」に組み込まれた寛文段階の差が強調され、「家中」の形成に伴い実質的な権限が家老に移り、藩主が権威化したという。「御家」「家中」、それに「家老」家格の形成を一体のものとして捉え、その先に藩政の成立を見ようとする本章の視角は本書全体を貫く。

〈第2章〉「近世初期大名隠居政治考—蜂須賀蓬庵の場合」は、三宅が近世初期特有の政治構造とみる隠居政治を取り上げたものである。慶長五（一六〇〇）年の蓬庵隠居から寛永一五（一六三八）年の死去までを四期に分けた上で、隠居政治を「隠居後も公儀や他大名との関係を保ち続けて幕藩関係の安定化につとめ、そうした幕藩領主世界における位置を背景に、家中の意識改革を行い、藩主中心の家中一体化を図ったもの」（八八頁）とまとめる。従来、隠居政治については細川三斎（隠居・忠利）（当主）の事例がよく知られてきた。そこでは三斎が藩主権力の確立に果

たした役割が述べられる一方、熊本転封後に隠居家督の世襲化を目論むなど、藩政を確立する上での足かせになった側面も指摘されてきた。これに比べて蜂須賀家の場合、蓬庵が「家中」形成に果たした役割が終始大きく描かれる。興味深いことに、当の蓬庵は元和六（一六二〇）年時に「我等義式拾三ヶ年以前令隠居候故、家中之善惡會而不相聞」（三五頁）とし、三宅が蓬庵中心と見る時期においても、自身が藩政から遊離していたと強調してみせる。三宅のいう隠居政治は少なくとも当の隠居にとって盛んに喧伝すべきものでなかった模様で、隠居政治をめぐる当時の認識が垣間見えるように思えた。

〔補論Ⅰ〕「秋長」書状の年代比定をめぐって―関ヶ原合戦と蜂須賀家政〕は、秋長（家政Ⅱ蓬庵）書状の年代を慶長五年に比定し直し、関ヶ原合戦後の徳川側の全国的軍事行動の一環として、家政による土佐出兵の動きがあったことを明らかにしたものである。

〔第3章〕「近世前期蜂須賀家と親類大名井伊直孝―幕藩関係における役割を中心に」は、幕閣に連なる親類井伊直孝が藩主に行った指南を分析し、蜂須賀家にとって直孝が家中統制・対幕関係の面において重要な存在であったことを述べたものである。本章では近世前期の「政治構造が人的関係に大きく規定されていた」（一〇九頁）との前提が明示される。すなわち蜂須賀家の場合、縁戚の直孝が類い希なる地位に昇ったことにより家中統制が上手く行き、幕藩関係が安定化した側面が強調される。とはいえ、直孝の指南などあってもなくても幕藩関係は安定せざるをえない点に、とりわけ家光期の本質があるように思わなくもない。「安

定化」の中身を問うことも求められてこよう（この点は全体に関わるので後述）。

〔第4章〕「近世蜂須賀家における家老政治の成立と展開」は、地方支配機構の整備と関わらせながら家老政治の成立と展開を描いたものである。参勤交代により藩主が不在になるため国許で家老政治が要請されたとし、ここに大名家一般に家老政治が普遍化した契機を見出す。そしてその導人に当たっては「外聞」を気にし、他家と同調する志向が背景にあったとする。三宅によれば「本書における中心的な論点を提示する」（二五頁）章ということで、まさに主題の家老政治を真正面から扱ったものである。第一章で証人制に「家老」家格形成の梃子の役割を見たように、本章では参勤交代制に家老政治成立の要因を見る。おそらく参勤交代制は家老政治を成り立たせるために創設されたものではなかったが、結果そのような意義を持ったことを明らかにする点に、大名側の史料から実態を構築する三宅の特徴がよく出ている。

〔第5章〕「藩政改革の政治構造―藩政史認識形成の視点から」は、宝暦期に家老に次ぐ中老格の賀嶋兵庫によつて初期藩政の歴史が捉え返され、①藩主の直仕置、②家老仕置と直仕置の併存、③まったくの家老仕置、の各段階が指定され、理想を②とする観念が以降の寛政改革などに影響を与えたことを論じたものである。一つの改革時に特定の意図をもって生み出された歴史認識がその後引き継がれ、新たな意図のもとで再利用される過程を描く本章は歴史認識論一般に通じる。一―四―七章をはじめ近世前期の政治史研究で知られる三宅の原点は中後期を扱った本章にあるということ、歴史認識という視座は本書において前期・中後期を

橋渡しする役割を果たしている。

〔補論2〕「御家」の継承―近世大名蜂須賀家の相続事情〕は、賀嶋兵庫の見立てにおいて、血筋の正統性が劣る藩主ほど「威光」が弱いと認識されている事実を突き止めたものである。いまだ試論にとどまる感はあるものの、寛文期までに確立したはずの「家中」ないし「御家」の内実がどの程度のものであったかを問う上でも、試金石として血統の正統性が劣る藩主に注目する視角は有効であろう。当面、藩主が権威化するという指摘（第一章）と、「威光」が弱いと見なされる藩主が存在したという事実を、どのように整合して理解すべきかは気になるところである。三宅も自覚するように、藩政認識の問題が実態と即応するかどうか、更なる分析が待たれる。

〔第6章〕「蜂須賀家文書「草案」の構成と伝来」は、近世前期の歴代藩主の書状留めⅡ「草案」が天保期に整理されたものであることを論じ、各史料の年代を確定させたものである。【付表】「蜂須賀家文書「草案」の年代比定」（二七六―二九一頁）のよくな基礎情報が共有されたことで、蜂須賀家研究のみならず近世前期政治史研究の環境が一段と整備された感を受ける。

〔第7章〕「幕藩政治秩序の成立―大名からみた家光政権」は、奢侈統制・キリシタン禁制・領国統治の重視などを大名に一律に及ぼそうとする家光政権への対応を迫られた諸大名が、幕府に近い親類大名の指導を受け、他家と歩調を合わせることで、幕藩領主に通底する政治秩序が成立したことを論じたものである。そのような秩序においては「江戸の大名社会」と「国許の家老政治」という江戸―国許関係に軸があり、これが一万石以上Ⅱ大名

に共通して見られる姿であるという。蜂須賀家から分析を開始した三宅なりの近世大名家研究の到達点といえよう。

〔結語〕「近世大名家の政治秩序と家老政治」では「近世大名蜂須賀家の成立」「近世政治秩序の形成過程―寛永―寛文期」「近世政治秩序の捉え返し―近世中後期」という三つの観点から、要旨が簡潔に確認される。

二

つづいて本書全体に関わって、評者が見出しえた意義と疑問点に触れる。

・時期設定

実質、慶長期から宝暦期を経て天保期までも扱う本書は近世前期と中後期の政治史研究の断絶を埋める試論ともいえる。両者を接着する役割を果たすのは〔第5章〕で見た藩政史認識という視座であり、これにより読み手は賀嶋兵庫の目と三宅の目の双方を通して徳島藩政に接近できるのである。とはいえ、前期と中後期では分析の手法に相違も感じた。とりわけ前期の論稿が実態を論じ、そこから意識ないし規則を抽出しようとしているのに対し、中後期の論稿は認識を論じ、それを受けた政治改革の分析へと進んでいる。構成上、宝暦期に賀嶋が認識した前期の藩政と、三宅が成立を見る幕藩政のどこが一致しどこが一致しないかが整理されない点は惜しまれる。前期の論稿が強調する外聞や江戸―国許関係といった論点を継承することで、賀嶋の認識を相対化しうるような中後期の新稿を期待したい。

・政治秩序

書名の通り、本書を近世大名家の政治秩序（行論ではしばしば幕藩政治秩序）を論じたものとするならば、政治秩序とは何かが問われなければならない。三宅はこれを「近世の政治のあり方における人々の意識や志向性等、政治構造を規定する規則性」（二二頁）と定義する。このような定義から評者は若尾政希『太平記読み』の時代（『平凡社、一九九九年』）のように、為政観が書物の講釈を通して広まるという指摘を真つ先に思い浮かべたが、実際には家老政治の分析を通して政治秩序に迫ろうしたところに本書の特色がある。しかしいうまでもなく、家老政治の分析のみで政治秩序が解明されるわけはなく、右のような意味で政治秩序を問題にしている以上、若尾や、近世大名の「御家」意識・戦略に注目した佐藤宏之『近世大名の権力編成と家意識』（吉川弘文館、二〇一〇年）などの関連性は気になるところである。三宅には単なる制度・政治過程史ではなく、意識や志向性をも含めたものとして政治秩序を捉えるが故の長所を自覚し、より広い視野からの分析を望みたい。その際、当主と隠居の関係（第2章）や血筋の正統性（補論2）といった家存続の機微に触れるような問題群は引き続き深めていくべきであろう。

・家老政治

家老政治の成立・展開を描いた研究として本書を捉える場合、高野信治の指摘^③とも関わるように、蜂須賀家の歴史性がどのように作用するかという観点は欠かせない。（序章）では蜂須賀家が本来の大名に「国持大名であることをもって、検討材料として適していることが主張される。しかし家老政治の成立・展開を考える

上では、藩主と家老の関係の歴史的経緯——一門なのか、付家老なのか、給人なのか——が一義的に重要であり、国持か城持かは本質ではない。蜂須賀氏と家老の関係の歴史性が家老政治にどのように作用し、ゆえに一般化する上でどのような点に留意が必要か、読み手に十分な材料が提示されているとまでは感じられなかった。なお三宅は（第1章）で、元和七年に忠英の後見を始めた蓬庵が七月一日付で「組頭・御鉄砲頭之面々」に宛てたものとして「覚」を引用する（三四～三五頁）。しかし同内容のものは同日付で、三宅が家老層と見なす山田織部（宗登）にも出されているため、本「覚」はより広範な層を対象としているものと想定すべきであろう。とするならば、その一箇条目に「当家之義為物頭、万可被令沙汰覚悟尤候」（ルビ引用者）とあり、蓬庵が家老も含めた層に向かつて物頭の沙汰を重視する姿勢を打ち出していることの意味は何であろうか。

（第四章）などにおいて一部言及はあるものの、全体として本書は家老のもとでそれぞれの実務を統括する組頭（中老格）の分析が弱い印象を受ける。ここで思い起こされるのは、寛永期の薩摩藩政改革が物頭（与頭）の創出を目指したとする山本博文の成果である。三宅の分析から、家老が何をすべきと期待されたかは伝わってくるものの、家老が実際に何をされたかはそれほど明らかではない。近世前期の組頭・中老に期待される役割をより丁寧に追うことで、家老がどの程度実際に政策立案に関わるかや、家老加判の形式化が初発段階からあったかどうかかが明瞭になり、さらには宝暦期の中老賀嶋がなぜ彼なりの藩政史認識を持つに至ったかも鮮明になろう。

・国持大名の主体性

本書最大の面白みは、笠谷が「国持」大名論考^⑥で論じる意味で独立性の強いはずの国持大名が、その実、外間を気にして横並びを志向し、幕閣に連なる親類を頼り、將軍の意向・好みを過敏に伺ったりするなど、繊細で気にしすぎる性質があったことを論じた点にある。何かと幕府の意向を伺うことを井伊直孝や松平定房ら幕閣に近い存在の人物がたしなめたりする（第三章）など、このような国持大名のあり方は幕閣に連なる層から見て、時に好ましくなかったともいう。三宅はこれを「幕藩関係のあり方が見直されようとしていた」（二三五頁）事例と興味深い評価をしてみせるだけに、見直されようとしていた幕藩関係の中身が何で、そのような見直しの動きがその後どのような展開を見せるかについて明示されないのは惜しい。

そこで気になるのは、三宅がどこに力点を置いて幕藩（とりわけ国持大名）関係を描こうとしているかという問題である。三宅の念頭にあるのは「個別藩政の事情と徳川政権の志向性、その政治的諸関係によるところの相互作用により形成されていくはずの幕藩領主に共通する政治秩序」（二二二頁、ルビ引用者）であったはずである。しかし徳川政権の志向性が個別藩政に影響する局面は描かれても（特に第七章）、個別藩政の事情が徳川政権の志向性に影響を及ぼした局面を明確に読み取ることは難しかった。同じ一七世紀を扱ったものでも、例えば吉村が参勤交代の制度化の背景に細川氏の献策を見たのに比べて、蜂須賀氏を主に取り上げた三宅の描く国持大名の姿は受け身である。

もつとも、この点は三宅の分析視角というより、阿波・淡路に

所領を持つ蜂須賀家の立ち位置に規定されているのかもしれない。キリシタンの問題や沿岸防備といった家光政権の最重要課題に、真正面から自らの存立にも関わる問題として主体的に取り組まざるをえない九州大名と、キリシタン禁制のあくまでも世間体を気にする蜂須賀家（三〇五頁）の差は少なからずあるように思うのである。

むしろそのような差があるとしても、家老政治が一律に展開するというのが三宅の意図であり成果であろう。それにしても、蜂須賀家のような国持大名がいわば主体的に従属していくこと（三宅にいわせれば幕藩関係の安定化か）の背景には何があるのだろうか。この問題を、「御家」存続への執念はもちろん、横並びではなく他家に抽んでようとする志向性とも関連づけて考える視座が欲しい。幕府への過度の擦り寄り、大大名としての自負、一見矛盾するかに見えなくもこれら二要素は、他大名に少しでも抽んでようとする志向に媒介されることで併存するように思われる。そしてそれらが家中全体に共有・再生産されるところに、三宅のいう藩政確立の到達点があるのであろう。とりわけ本書は横並びを強調する分、国持大名ないしその家中としての自己主張の面を捨象した点には物足りなさが残る。

以上、蜂須賀家を主な事例にしながら近世大名全体を見通そうとした三宅の意欲作を前に、雑駁な感想を重ねてきた。書名に蜂須賀という語を用いなかった三宅の思いに思いを馳せながら、一方で個別性から共通性を見ることの難しさについても、改めて考えさせられた。そもそもある事象が個別のものであるか共通の

ものであるか、その判断基準をどのように担保したらよいか。これらの課題に対する問題提起としても、本書は今後の藩政史研究において参照されるべきであろう。藩を語る前提として大名家の政治秩序を一通り描いた三宅が、今後いかに藩そのものを総体として語ってくれるのか、次作への期待は膨らむばかりである。

- ① 藤尾隆志『ヒストリア』二四六(二〇一四)、福田千鶴『日本史研究』六二九(二〇一五)、根津寿夫『歴史評論』七八六(二〇一五)、高野信治『歴史学研究』九三六(二〇一五)など。
- ② 吉村豊雄『近世大名家の権力と領主経済』(清文堂出版、二〇〇一年)。
- ③ 高野信治「領主結集と幕藩制―三宅正浩報告―幕藩政治秩序の成立」に接して、『日本史研究』五八二(二〇一一年)。
- ④ 徳島城博物館編『蜂須賀三代 正勝・家政・至鎮』(二〇一〇年)。
- ⑤ 山本博文『幕藩制の成立と近世の国制』(校倉書房、一九九〇年)。
- ⑥ 笠谷和比古『武家政治の源流と展開』(清文堂出版、二〇一一年)。
- ⑦ 笠谷は国持大名が、儀礼上の格式・政治的権能・領地領有権のあり方の各点において、一般大名と隔絶した地位と格式を持っていたとする。

注②前掲。

(A5判 三四六頁 二〇一四年一月)

校倉書房 税別一〇〇〇円)

(大阪歴史博物館学芸員)